

九州大学総合研究 博物館ニュース

April 2010 No.14

博物館は、設立 10 周年を迎えました

2000 年 4 月 1 日に学内共同教育研究施設として設置された九州大学総合研究博物館は、今年で満 10 周年となりました。当館の誕生までには、学内外の多くの皆様のご尽力とご支援があります。

1980 年代、総合研究資料館設置準備委員会は「九州大学所蔵標本・資料」を発売して研究資料館の必要性を訴えました。1996 年、学術審議会学術資料部会が「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について」という報告を出し、“大学等の学術標本を整理、保存、公開・展示し、情報提供するとともに、これを対象に組織的に独自の研究教育を行い、また、「社会に開かれた大学」の窓口として、多様な学習ニーズに対応できるユニバーシティ・ミュージアムの設置が必要である”と提言しました。これを受けて九州大学は、直ちに杉岡洋一総長の下にユニバーシティ・ミュージアム設置準備委員会を設け、博物館



子ども向けの展示も得意になってきました。

構想の検討を
始めました。3
回の先行展示
を開催して実
績を積むとと
もに、本省と
の多くの折衝
を経て、大学
博物館が設置
されました。

博物館活動は、学外公共施設における公開展示、福岡空港第 1 ターミナルでのサテライト展示、理系学生のための学芸員養成、全学標本資料調査からスタートしました。2002 年には、博物館相当施設の認定を受け、博物館実習を開講できるようになりました。その後、第一および第二分館の設置、常設展示室のオープンなど、いくつかの大きな動きを経て今日に至っています。



設立当時の研究棟の前で。手前右が杉岡元総長、左は潮川淳一初代館長（現農学部名誉教授）。

昨年 12 月まで西日本新聞に連載された聞き書きの中で、九大博について 2 回にわたり言及されており、大学博物館設立への熱い思いに胸打たれます。心からご冥福をお祈りし、伊都キャンパスに明るく楽しい博物館が完成するよう努力していくことを、ここにお誓いいたします。

最後に、九州大学総合研究博物館の生みの親である杉岡洋一総長が 2009 年 11 月 27 日、お亡くなりになりました。

九州大学総合研究博物館館長 松隈 明彦

博物館設立 10 周年記念特集

— 九大博のこれまでとこれから —



設立後初めての公開展示「森・水・人」、会場は福岡市博物館でした。(2000年5月)



2002年5月から、P&P特別展示が始まりました。(例年、箱崎キャンパス内にて)



2003年、九大は芸術工科大学と統合。特別展示を開催しました。(2003年10月、箱崎キャンパス)



2007年3月、旧工学部本館3階9番講義室を常設展示室として改装。同時期、青山熊治画伯の壁画が有名な4階会議室も博物館に移産。いずれも、2008年5月から公開しました。写真は、設置途中の常設展示室内。



ロゴマークは、一般公募の中から選ばれました(2005年1月)。曲線が美しいこのロゴマークを、博物館教職員はとても気に入っています。



工学部の移転後の2006年3月、旧知能機械工場跡地を改装し、5月に第一分館として開所。現在、骨格標本類、鉱石標本(高標本)、考古・民族資料等(玉泉館資料など)が収蔵展示されています。写真は、工場跡地倉庫にたたく歴史の産業遺産の機械類。



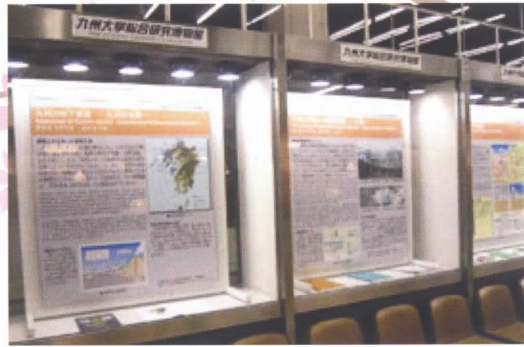
2008年・2009年に実施した「ひらめき☆ときめきサイエンス」。(県立英彦山青年の家において、8月)



毎年11月か3月に公開講演会を開催。



始めて子ども向け施設（福岡市少年科学文化会館）で開催した公開展示。この頃はまだ、子ども向けの工夫が下手でした（2002年8月）



福岡空港サテライト展示開始（2002年～）。この後、前原市内（2004年～）、福岡市内（2005年～）、志摩町・二丈町（2006年～）にもサテライト展示ケースを設置しました。



博物館実習風景。標本はうまく作れましたか？



データベース化作業風景。標本整理が完了するまでの道のりは長い……。写真は、水産学教室で藻類標本のデータベース化作業中の吉田忠生先生（北海道大学名誉教授）

九大博、これからの10年

これまでの10年間で九大博は、箱崎キャンパスでの活動や収蔵スペースの確保、標本資料の整理や情報発信などの教育・研究・アウトリーチに重点を置きました。九州大学のキャンパス移転完了予定の2018年まであと10年を切り、今後は、どのようにして伊都キャンパスに活動拠点となる博物館を建てるかということについて、実践的な活動が必要となります。

現在文科省により保証されている博物館面積は約460平米のみであり、また、九州大学は移転を優先させねばならないため、概算要求による博物館建物の建設、あるいは箱崎キャンパスの既存の建物を改修して博物館として利用するという手法がとれません。つまり、博物館建設は、我々自身の努力と、地域の皆様の御理解と御支援を頂くことにより、自らの手で実現させることとなります。

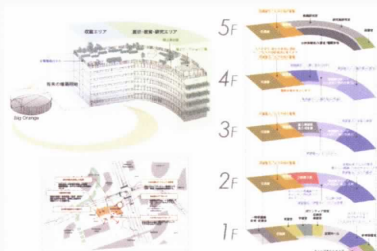
大学博物館が素晴らしい施設であり、本当に必要であると理解してもらい、皆様に「博物館を作ろう！」と心から思ってもらえるよう、私たちは、九州大学の研究成果や学術標本・資料を積極的に学外で開示し、

児童生徒や一般社会人に「発見の素晴らしさと研究の楽しさ」を体感してもらいたいと考えています。九州大学の持つ膨大な標本や学術資産と2200人を超える研究者、これら大学のリソースとコンテンツを活用し、県や市とも協力し、博物館を造ろうと訴えかけていきます。

九大博では、企業や業界と連携し、その産業活動や社会貢献の成果や歴史を展示したり、産学連携技術を導入することも試みます。博物館を、九州大学の教育・研究の実証実験や成果実装の場とし、総合的な研究博物館として、異分野の研究者が集う新しい学際的研究を産み出すつばにしたいと考えています。

私たちは、博物館が、発見と楽しみと新しいものを創出する場となり、真に豊かな生涯学習社会を支える一助となるよう、尽力していきます。

九州大学総合研究博物館館長 松隈 明彦



10周年記念事業のご案内

九大博のこれまでの10年を記念し、また、これからの10年の布石となるべく、今年度は様々な活動をしていきます。ここでは、一般の皆様向けに実施する取り組みについてご紹介します。

なお学内的には、この10年目の節目とともに共同研究・教育体制を強化するため、博物館をはじめ、芸術工学研究院、工学研究院、システム情報学研究院、理学研究院、農学研究院、人文科学研究院、比較文化社会学研究院、人間環境学研究院、統合新領域学府、情報基盤研究開発センター、高等教育開発推進センター、社会連携課、および学外博物館・学校等から総勢43名の研究者・専門家にご参画いただき、「Renovative Museology 創成リサーチコア」を形成いたしました。リサーチコアとは、研究教育支援のための九大独自の認定制度です。今回コアの名称をあえて英語表記にすることで、概念的な「博物館」の枠にとらわれることを回避しようとしています。以下に紹介した特別展やプロジェクトなどの取り組みの中でも徐々に、そのコンセプトや方向性を顕わしていきたいと考えています。

「大塚勲と熊本県の昆虫」展（平成22年3月14日～25日）

大塚勲氏（故人）は戦後まもなくから、多くの研究者の協力のもと、広範な分類群の昆虫について熊本県における生息状況を調べました。当館では2008年にご遺族からそれらの調査に基づく膨大な標本と文献類の寄贈を受け、現在はその整理を進めています。標本の多くは一流の専門家によって同定されたものであり、個人の昆虫標本収集としては類稀な質の高いものです。



蛾類の標本、桐インロウ箱をそのまま展示しました。展示場の様子（箱崎キャンパス50周年記念講堂2階）

今回はその収集の内容の一部を展示し、今坂正一さんから故人のご友人のご協力のもと、大塚氏の業績をパネル紹介しました。

（担当：丸山）

九大博設立10周年特別展示「光が泳ぐ場所」

日時：平成22年5月10日（月）～21日（金） 12:00～17:00（最終日のみ20:00まで）

場所：九州大学箱崎キャンパス、旧工学部本館5・6階

現在博物館が入っている旧工学部本館には、かつては展望室だったという特異な空間があります。普段あまり使われないその場所は、少しさびれた中にも何故か私たちに惹き付けるものがあります。箱崎在住のアートユニット・QULTEとのコラボレーションにより、場所の固有性と九大博の魅力ある収蔵物との響き合いを求め、「光・美・場」をテーマに、これまでの九大博にない展示手法に挑戦する企画展示第一弾です。（第二弾は秋に開催予定）



（担当：三島）

平成22年度公開展示「人のからだ・動物のからだ」

日時：平成22年7月21日～8月30日 9:00～17:00

場所：福岡市少年科学文化会館1階学習室（福岡市中央区舞鶴2-5-27）

人の体や動物の体を素材として活躍されている九州大学の先生方の研究を中心に、標本や模型、映像、研究成果品などに実際に見て・触れて・実感できる展示を準備しています。からだの形態や機能、生理、病気、比較解剖、進化、形質人類学、3D情報の取り込みやCGでの再現、再生医療、知能機械、ロボットなど、幅広い分野を扱います。多くの子供さんが、第一線の研究からたくさんの不思議さと楽しさに気づき、研究の素晴らしさに感動して将来の科学者を夢見ていただけることを期待しています。

（担当：松隈）

サイエンスカフェ Q cafe 2010 九大博 10 周年スペシャル

2008 年度の博物館実習から始まった九州大学のサイエンスカフェ「Q cafe」。九州大学の学生と教員による、ボランティアな取り組みです。2010 年度は九大博が中心となり、年間とおして開催していきます。まず最初は、10 周年特別展示「光が泳ぐ場所」とタイアップしたシリーズ「夜カフェ」。九大の研究者が、「光・美・場」にまつわる研究を、わかりやすくお話しします。QULTE がアレンジする会場（旧知能機械工場）の雰囲気もお楽しみ下さい。このほか、博物館兼任教員や終了した P&P 研究課題の中で要望の高かった研究者などを演者として、街のカフェで開催していきます。

Q cafe 2010・九大博 10 周年スペシャル

● シリーズ「夜カフェ」

第 1 話：平成 22 年 5 月 11 日（火）19：00～20：30

若山 正人 氏（数理学研究院）

第 2 話：平成 22 年 5 月 12 日（水）19：00～20：30

大井 尚行 氏（芸術工学研究院）

第 3 話：平成 22 年 5 月 13 日（木）19：00～20：30

後小路 雅弘 氏（人文科学研究院）

場所：九州大学総合研究博物館第一分館倉庫（箱崎キャンパス内旧知能機械工場）

参加費：500 円（予定。茶菓が出ます） 参加受付：4 月 15 日～



Q cafe 2008 のひとコマ。

● シリーズ「P&P」など

演者：年間を通して開催、P&P 終了課題研究者や九大教員など

場所と時間：詳細未定、街のカフェなどで行います

※いずれもお申し込みが必要です。九州大学ウェブサイトのイベント情報をご参照いただくか、博物館事務室までお問い合わせ下さい。（担当：三島）

「みんなでつくる！ミュージアム」プロジェクト

九大所蔵の標本資料をより知っていただくために、糸島エリアを中心に、ミニ巡回展を行います。それに伴う標本作製講座やセミナーも予定しています。また、一般の皆さんが求めるこれからの生涯学習の「場」を一緒に考える、巡回ワークショップも計画しています。

学内では、博物館実習や、統合新領域学府や芸術工学学府・研究院の演習において、伊都での博物館活動を想定したパイロット企画や建物デザインを課題に取り上げます。

（担当：博物館教員、協力：芸術工学研究院、統合新領域学府）



普段お見せ出来ない標本・資料を巡回させます。



標本作成講座イメージ。



演習風景。

九大博 10 周年記念・大学博物館シンポジウム（2011 年 3 月頃に開催予定）

これからの大学博物館のあり方を考えるシンポジウムを開催します（予定）。国内外の大学博物館の専門家に、現状や先行事例などを紹介してもらい、パネルディスカッションやワールドカフェで議論を深めます。

「みんなで作る！ミュージアム」

2007年度から、大学博物館を活用した実践的教育研究に取り組んできています。今号と次号で、2009年度の博物館実習などで学生さんたちと一緒にいった実践的な取り組みをご紹介します。

第2回学生による企画展示「日本人の婚礼と葬礼」

日時：平成21年12月1日～平成22年6月30日

場所：総合研究博物館平常展示室（九州大学箱崎キャンパス・50周年記念講堂3階）

総合研究博物館専門研究員の矢野健太郎です。博物館平常展示室で開催されている「学生による企画展示」についてご紹介します。

この企画展示は、九州大学、西南学院大学の大学院生4名と私を含む博物館の専門研究員がワーキンググループを結成し、企画・調査・パネル作成・設営・展示までの全ての作業を学生が中心となり、博物館の宮崎先生に監修いただいたものです。第1回目は「19世紀の日本人」と題して、ロシアのサンクトペテルブルグにあるクストカーメラ（ロシア初の博物館）が収蔵している絵画から、19世紀の日本人のライフサイクルについて紹介するパネル展示を行いました（平成21年6月1日～11月30日）。

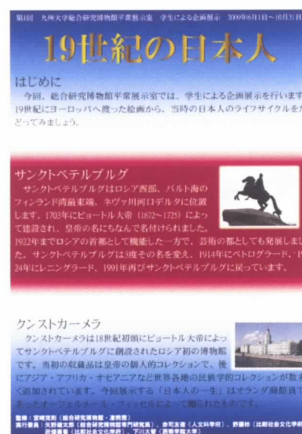
現在開催している第2回目は、「日本人の婚礼と葬礼」と題して、日本人のライフサイクルのなかでも大きな節目となる婚礼と葬礼を中心にとりあげています（平成21年12月1日～2010年6月30日）。婚礼や葬礼について、現在ではすでに失われたしきたりや、現代の結婚式や葬式における儀式的ルーツを見ることが

できます。

私の専門は日本近世史ですが、このような展示を企画したのは今回が初めてでした。パネル作成は慣れないソフトを使った作業との格闘で大変でしたが、ワーキンググループでの調査や報告会は楽しかったです。一般的な博物館よりも見劣りする点はありますが、随所に学生らしさが出ていることと思います。学生たちがどのような展示を行っているのか、ご覧いただけると嬉しいです。

平常展示室の開場は不定期ですので、お越しになる前に、博物館事務室（電話：642-4252）までお問い合わせ下さい。

実行委員メンバー：九州大学大学院・赤司友徳、野藤妙、田畑春香、西南学院大学大学院・下川大智、総合研究博物館専門研究員・矢野健太郎。



学生が企画した「通信使海道」展

日時：平成22年2月19日～4月4日

場所：佐賀県立名護屋城博物館企画展示室

佐賀県立名護屋城博物館・学芸員の久野哲矢です。この展示会は、九大博の宮崎先生が指導にあたられている博物館実習の受講生たちと当館が協力し、また九大記録資料館の梶嶋先生にもご協力いただき、企画・実施したものです。上記テーマのもと、資料の選定・展示の構成・パンフレット編集、そして実際の展示に至るまで、その全過程を学生と学芸員がともに取り組んだ9ヶ月間の成果です。

学生チームは7名編成で、日本史専攻の他に国文学・英文学・言語学・心理学など多様な分野からの学生が集まりました。本物の資料を前に緊張しながらの資料調査、

ゼロからものを作る難しさを味わった展示のレイアウト、リーフレットの製作。時間と戦いながら、しかし納得のいくものを目指した展示作業。すべて本物の学芸員と同じように取り組んできたこの展示会は、平成22年4月4日まで開催され、好評を博しました。

学生チームメンバー：岡本大樹、日下幸織、安河内敬太、池田則之、関隆造、麻生由季。



編み物で、サンゴを編んじゃった！

福原美恵子・清水麻記

「編み物でサンゴを編んじゃおう！世界の珊瑚礁を守る Coral Reef プロジェクト」が平成 21 年 11 月 14 日に、福岡市立少年科学文化会館で開催されました。当時当館の専門研究員であった清水が、NPO 法人ミュージアム研究会理事として日本財団の助成のもと主催したイベントです。

アメリカロサンゼルスから造形研究所所長マーガレット ワertime さん (Ms. Margaret Wertheim) を講師としてお招きしました。物理学の修士号を持つマーガレットさんは、科学の美しさと楽しさをさまざまな立場の人たちに伝え、共有することをライフワークとされています。今回、スーツケースまるまる一個に編み物のサンゴを詰め込んで来日くださいました。

編み物の技法の一つであるかぎ針編みで、増し目を規則的に繰り返しながらモチーフを編んでいくと、表面が波打った物体が編み上がります。この物体は、双曲平面 (Hyperbolic Plane) の数学的に完璧な模型として、1997 年にアメリカ・コーネル大学の数学者 (※) によって考案されたそうです。双曲平面は非ユークリッド幾何学に属する双曲線幾何学で扱われるものです。数学的な秩序が生物の形態に内在することはよく知られていますが、双曲平面もある種のサンゴや海綿、ウミウシ、海藻などが持つひらひらしたフリルのような構造として存在しています。このようなサンゴ礁は、マーガレットさん

が伝えたい自然科学の美しさそのものであるとともに、環境問題が深刻な今、その保護を切実に訴えたい対象です。マーガレットさんは、今回のような編み物のサンゴをとおして、環境問題に取り組んでいるのです。

マーガレットさんのお話の後、私たちも、実際にサンゴを編みました (写真左端)。かぎ針をうまく扱えない小さな子供たちは、ポンポンのウニを作りました (写真中)。最初は間違えないように真剣に、しばらくすると色鮮やかな作品ができあがってくるのにワクワクしながらの楽しい時間になりました。完成したサンゴとウニは、マーガレットさんが本物のサンゴとともに美しく配置して下さいました (写真右端)。その真剣なまなざしに、展示品を活かし、そこからメッセージを発信することを考えるキュレータ (学芸員) という仕事についても、参加者は感じるころがあったように思います。また、マーガレットさんの言葉は通訳の内村さんに同時通訳いただいたのですが、内村さんの素晴らしいお仕事ぶりにあこがれのまなざしを向ける参加者が多くいたことも付け加えておきたいと思います。

2010 年秋には、アメリカのワシントン DC にあるスミソニアン自然史博物館で、このかぎ編みサンゴの展示が企画されていて楽しみです。

(福原美恵子：総合研究博物館・支援研究員)

(清水 麻記：総合研究博物館・専門研究員)



サンゴチームは黙々と編んでいます。



ウニチームは、色選びも楽しんで作成中。



作品の配置をしているマーガレットさん。

参考

マーガレットさんが主催する、The Institute For Figuring のホームページ
<http://www.theiff.org/main.html>

※D.W. Henderson, and D. Taimina. 2001. Crocheting the Hyperbolic Plane. Mathematical Intelligencer 23(2): 17-28.
<http://www.math.cornell.edu/~dtaimina/hypplanes.htm> 内の <http://www.math.cornell.edu/~dwh/papers/crochet/crochet.html> にて閲覧できます。

NPO 法人ミュージアム研究会／かぎ編みサンゴ報告書

<http://www.museumlab.net/event/index.html> / <http://www.museumlab.net/event/pdf/coralreefj.pdf>

